



ムカシの競馬を読む



すだ たかお
須田 鷹雄

1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレッド、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

第118回 10年・20年・30年前の5月

今から10年前、平成17年の5月といえば、ディープインパクトがダービーを制した月。ディープインパクトが「10年前の馬」になりつつあるのかと思うと、時の流れの速さが身にしみる。

ディープインパクトで競馬を覚えたファンがもうキャリア10年になるわけで、既に初心者の域は脱している。会員の皆さんにもこの「世代」の人がいるかもしれないが、10年間変わらず競馬をお楽しみいただけているだろうか。

ディープインパクト・日本ダービーが競馬の最高峰だとするならば、その対極、小さな競馬場で一生懸命走っている馬たちもいる。今回はまず、そんな10年前の出来事をご紹介しよう。平成17年5月4日付のスポーツ報知から。

「デビュー以来1-3連敗中の牝馬ハルウララが人気を集めた高知競馬で3日、戦後生まれの競走馬では日本最高齢出走タイとなる記録が誕生した」

「14歳馬オースミレバードがダービー1800メートルで争われた9Rのポンプ小松特別に出走。148戦目(通算29勝)となったこの日は7番人気だったが、後方のまま11頭立て10着に終わった」

記事ではJRA→大井→中津のテイサウンド、JRAのミスタートウジンに続き3例目と紹介されており、テイサウンドは満14歳の3月15日、ミスタートウジンは1月29日が最後のレースなので、5月に出走した時点でオースミレバードはタイミングとしても、日にち単位での満年齢でも新記録だと騒がれた。

ただここからがややこしく、まずオークス馬ヒサトモが戦後の混乱期に南関東で走った事例があるということになり「戦後生まれ」という前提がついた(記事中にも表記がある)。続いて、益田で1970年代に14歳2ヶ月まで走った馬がいるという話になり、実は新記録は一歩手前でお預けだったということに

なったのである。

しかしオースミレバードは自力ですべての記録を塗り替えた。ここからさらに2年半走り、最後のレースは満16歳6ヶ月となった平成19年11月。その2ヶ月前には満16歳4ヶ月で勝利をあげており、これは先述したヒサトモの最高齢優勝・出走記録(15歳6ヶ月)を大幅に更新するものだった。

ちなみに現在登録されている現役サラブレッドの最高齢は明け15歳の2頭で、うち1頭は2戦0で1年以上出走のない実質引退馬。残る1頭、ホツカイドウ競馬のクラブスタダンサーにはまだ記録更新のチャンスが残っている。

続いてもうひとつ、今年10周年となる施設の話。平成17年5月13日付の朝日新聞・山口版から引用する。「日本中央競馬会(JRA)直営のウインズ小郡(場外馬券売り場)が小郡町上郷に開設され、12日、開所式があった。岩城精二町長ら

がテーブカットに参加。21日にオープンする」

正直なところ関東人などから見ると地味なイメージがあり規模も小さいウインズ小郡だが、実はそれまでのウインズとは違う特徴を持っていた。JRAが土地、建物を管理する全国初の直営ウインズだったのである。

後にウインズ八代も同様の形でオープンするが、一方で平成25年にはウインズ銀座通り、室蘭、静内が営業を終了している。ウインズ小郡もそれまでのウインズに比べるとうかかなり低コストに作られており、現金投票の施設である一方、現金投票の時代が一段落したことを象徴する施設とも言える。

続いて今から20年前、平成7年の5月。この月はタヤスツヨシがダービーを勝った月でもあるが、厳戒態勢の中で行われたダービーだった。29日付の東京新聞から。「二万頭以上のサラブレッド四歳馬(筆者注：旧表記)の頂点を決

める第62回日本ダービーが28日午後、東京競馬場で開催された。地下鉄サリン事件などの余波で、異例の手荷物検査を実施したり、ゴミ箱を頻りに点検するなど物々しい警備態勢が敷かれ、警察官やガードマンの姿が目立った」

既にオウム真理教の幹部は逮捕された後だったが、この時期の東京は駅などからゴミ箱が一切消えていた。競馬場でも記事にあるような警備を実施。いまでも大レースのときは入場時に手荷物検査があるが、その最初となったのがおそらくこのダービーだろう。

20年前からもうひとつ、こちらはボジティブな出来事。5月9日付の内外タイムスから引用する。「ゴールデンウィーク最終日の7日、川崎市の川崎競馬場でナイト1競馬が開幕した。東京・大井と北海道・旭川に次いで全国で3番目。赤字に悩む主催者の神奈川県と川崎市が「若者や女性のファン獲得に成功した大井競馬場に続け」と企画した」

「初日の7日は曇り空の下での開催。東京や横浜方面から子供連れや若いカップルが続々と詰めかけ、入場者は2万人を突破した」「ナイト1競馬は10月まで計40レース(筆者注：40開催日)の予定

で、神奈川県公営事業所は『県だけで本年度約2億円の黒字』とそろばんをはかしている」

さらに記事を読んでもみると、当時は周辺住民への騒音対策として場内の実況は無しだったという。いつの時代も公営競技は肩身が狭く、世間に遠慮しなくてはならない悲しい身だ。

実はここからさらに10年、今から30年前の5月には、川崎競馬の存廃論議が盛んになっていた。存廃を論じる委員会が廃止の方向性を打ち出し、新聞によつては「川崎競馬、廃止」という見出しを打ったところもあった。

そこから苦戦を重ね、そのひとつがナイト1導入だったわけだが、残念ながらこれでもまだ逆転の一打にはならなかった。経営が好転したのはつい最近で、今年の1月になって以降、累積赤字の解消が発表された。県競馬になった平成12年以降初の累積一掃で、最大時36億円あったものを解消したというから、これはめでたい限りである。

最後は30年前、昭和60年の5月から。30日付のスポニチから引用しよう。

「競馬のジャーニー・ダービーは27日当地のガーデンステート競馬場で行われ、ケンタッキーダービーの勝ち馬スベンドアバック(フット

・ピンカイ騎手)が首差で優勝した。このレースでスベンドアバックは競馬史上最高の賞金260万ドルを獲得した。1着賞金は60万ドルで、ガーデンステート競馬場オーナーのロバート・ブレナン氏からチアリーヒルマイル、ガーデンステートステークス、ケンタッキー、ジャーニー両ダービーを制したポナナス賞金200万ドルも併せて贈られた」

当時ニュージャーニー州に存在したガーデンステート競馬場が、火事で消失したスタンドの新装記念で設定したポナナスが200万ドル。自場の3レースとケンタッキーダービーを制した馬に対し設定されたもので、2レース+ケンタッキーダービーを制したスベンドアバックはプリークネスを捨ててこちらに向かっていた。このレースで2着に負かしたクレームフレッシュが後にベルモントSを制しているくらいだから、本来なら三冠の可能性もあったのではと思えるところだが……。

この当時派手な経営をしていたガーデンステート競馬場だが、後に経営難となり、平成13年5月に廃止。跡地には既に競馬場の面影はなく、アメリカのどこにでもあるようなショッピングモールに変わっている。

ムカシの競馬を読む



平成17年・東京競馬場
日本ダービー
優勝馬：ディープインパクト

© JRA